

マディソンからシカゴへ

八 木 三 男

一、マディソンにて

(一) 農民市場

一九九四年八月末の土曜日、ウィスコンシン州の州都マディソンにおけるアメリカ最初の朝は七時に教会の鐘の音で目醒めた。ホテル、イン・オン・ザ・パークのまえの白亜の州議事堂を取り巻くようにして、キャピトル広場の農民市場がもう賑やかに活動を始めていた。この朝市はマディソンがアメリカ中西部でもっとも古く、合衆国で最良の市場のひとつと誇っているものである。五月から一月にかけて毎土曜に開かれる。娘夫婦の友人、ウィスコンシン大学の文化人類学者D・モエン氏夫妻の絶妙な計らいで、居ながらにしてこの高名な朝市の活況に遭遇できたのであった。

一辺二百メートル以上はある四角いキャピトル広場の二辺を占めて、近在の農民がそれぞれにテントを張り、思い思いの店の形態であらゆる種類の野菜・乳製品・パンやジュースなどを売っている。先住民族の店もある。男も女も年寄から乳児に至るすべての年齢層の市民が肩を触れ合うようにして一方通行でそぞろ歩きしていた。大学生らしい若者のグループも多い。そ

これらの人々には、どうしても今日の食卓の材料を求めなければならぬという現実的なある種の切迫感はなく、いわば家族ぐるみの朝のジョギング感覚なのである。日本流ではこれは毎週訪れる縁日なのであろう。ふと気づくと、黒人が全くいないに等しいのだった。それは白人と黒人の厳しい棲みわけのせいらしいのであった。

妻がぐい呑みほどの試飲用紙コップをジュース屋から調達してきた。わたくしたち夫婦、娘夫婦と二歳半の孫の五人は広場の美しく刈り込まれた芝生の木陰に坐って、マッフィンと大ビンのりんごジュースで、何とも粗末にして簡便なアメリカ最初の朝食をとった。もう汗ばむほどの気温になった。

(二) プレリー・スタイル

マディソンはモノナ湖とメンドタ湖を区切る狭部に発達した美しい街である。狭部は幅約二キロ長さ約一〇キロあり、その中心に州議事堂（タイトル写真）がそびえている。街路はそこから放射状にのびる。また、マディソンはウィスコンシン大学の街でもある。大学はメンドタ湖に沿って、幅千数百メートル、長さ六、七キロに及ぶ広大なキャンパスを擁し、キャンパス内に林も丘陵もあった。大学と市街を区切るものはなに

もない。生協の食堂のテラスは湖の岸辺にあり、ヨット・ハーバーに連なっていた。その広大さはほとんど日本の大学の概念を超えていた。

マディソンの街の美しさは合衆国でもおそらく有数のもののなのであろう。日曜日にアイオアのミシシッピー右岸にあるやはり大学の街デューブークのクラーク大学から、わたくしたち夫婦の友人ミス・C・サドウスキーが百五十キロほどの道のりをわざわざ会いにきてくれたが、彼女もマディソンを殊の外チャーミングな街だといった。

これもD・モエン氏夫妻の配慮によるのだが、わたくしたちはコリンズ・ハウスというメンドタ湖を一望できる素敵な「民宿」にとまった。「民宿」はベット・アンド・ブレイクファスト・イン（朝食つき宿屋）通常B&Bというが、マディソン中心街のれっきとしたホテル、イン・オン・ザ・パークよりよほど値段が高い。B&Bというのはウィスコンシンでは一九世紀末にできたアットホームな宿屋のことである。コリンズ・ハウスの客室は全部で四つ。朝食をもてなしてくれたのは二日とも違う女で、それぞれいかにも農民的な土の香りのするような素朴な親切さをもっていた。掃除は若い黒人だった。いずれもパートの主婦であるう。



B & Bのコリンズハウス (マディソン)

ここでいいたいのはB & Bの歴史や機能ではない。一九二二年に建てられ、八〇年経った今も現役のコリンズ・ハウスの建築様式のことである。コリンズ一族だけでもこの種の住宅はマディソンに三つあるそうである。いずれもウィスコンシン大学からメンドタ湖にそって北東にのびる東ゴラム通りにある。これらの建造物の様式はブレイリー・スタイル(大草原様式)といわれる。

ブレイリー・スタイルは日本の帝国ホテルを設計したフランク・L・ライトが創造した建築様式である。ライトは少年時代の一〇年をマディソンで過ごし、幼

友達の家をはじめとして実際に彼の設計になる家屋も数軒あるらしい。屋根のひさしが長く突き出ている、広い屋根が家を蔽っているように見える。今世紀の初頭に建てられ、いまなお現役でその美しい容姿を街の随所に見せ、とくに、東ゴラム通りからさらにメンドタ湖に沿って延びるシャーマン街にかけて蟬集する、と案内書にあった。そのほか、ブレイリー・スタイルではないが、やはり今世紀初頭に建てられた二、三階建ての主として学生用のアパート群も街を美しいものになっている。マディソンの美しさは結局街の中心街というより、大学や住宅街ということになる。詳しくはマディソン市の基金で出版されている、地区別に建築遺産だけを収録した数冊の小冊子『マディソン・ウォーキング・ツアー』(Madison Heritage Publication)で知ることができる。

一言いい添えると、東ゴラム通りやシャーマン街は一八五〇年代に、氷河がもたらした碎屑の堆積丘の上にできた街衢らしいが、メンドタ湖を一望できる明媚な場所にある。そこにダウンタウンに店をもつ商人や銀行家といった主とした中産階級の人々が集まった。そのなかにF・L・ライトの両親もあり、ユニテリアン教会の熱心な活動家だったという。一九世紀半ばといえば、エマソンやソローがユニテリアン教会によっ

て、カルヴィニズムに対抗して人道主義と良心の擁護を標榜し、さかんに政府批判を展開していたところである。ソローはいった「市民はかりそめにも、又一步たりとも自らの良心を立法者任せにしてはならない」(市民としての反抗)一八四九年)。また、エマソン

は個人の尊厳と「自恃の精神」を旧世界と異なるアメリカの「新精神」を説き、「アリゲニ山脈まではヨーロッパの延長である。そこを超えて初めて真のアメリカがある」といったが、ウィスコンシンはまさに「新精神」を発揮するにふさわしい場所であったであろう。GRAMやシャーマンの街衢名にしても、アメリカ憲法の署名人ナサニル・GRAM、独立宣言の署名人ロジャー・シャーマンにちなんで命名されたところ。当時の潑刺としたフロンティア精神がマディソンの街を形成していったらしいことが推測される。

マディソンの美しさのもうひとつの要素として、街が豊かな緑で蔽われているという印象のほかに、大学や住宅地に広がる芝生がどこでもよく整備されていてゴミがほとんど落ちていないことをあげることができる。朝ジョギングする市民が街路のゴミを拾ってごみ箱のドラムかんに投げ込むのを目撃した。

かつて一六世紀にしる幕末や明治にしる日本にきた欧米人たち(フロイス、パークス、モース等)が共通

して感嘆したものに、当時の欧米に比べて、子どもがいかに慈しみ育てられている印象とともに、日本の街の清潔さがあった。むしろ日本の自然については、うっとりするような、夢のような景色等という叙述がいくらでもでてくる。

しかし、清潔さと都市の景観の美しさは直接には関係ないであろう。日本の都市は今も清潔ではあるが、美しいとはいえない。ウィスコンシンは自然景観の殊の外美しいところだが、自動車で走っても、野立ての看板がほとんどなく、日本とは対照的だ。都市景観でも、かつて封建時代の日本の都市は欧米とは異なる独特の美しさをもっていた。京都祇園の町並みの美しさである。ヨーロッパの小都市の町並みでもそうだが、厳しい規制と共通の美意識による都市景観の美しさは中世のものである。聳えたつ教会を除けば、建物の高さに均一性があるのが一般である。近代はそれを破壊し続けた。シカゴの不揃いの摩天楼群は巨大な墓標のようで美しさからは遠い。

(三) 「鈴弁殺し」

旅からもどつて二、三日したら、娘の連れ合いから電話があり、猪俣津南雄の留学先がウィスコンシン大であったと知らせてくれた。「お父さん、気がつけば

よかったですね」。残念ではあるが仕方がない。

猪俣津南雄は大正期にアメリカで片山潜らと交わり、二七年テーゼの二段階革命論に反対して共産党を離れ、以後労農派のイデオログとして日本資本主義論争に参加した社会主義者である。岩波文庫に『農村の窮乏』がある。しかし、いまのわたくしはそれらの論争に興味があるわけではない。『農村の窮乏』のほかは彼の著作も彼に関する評伝も読んでいない。時間ができたら読み込もうと思っているだけである。実は彼は長岡中学の出身でいわばわたくしの大先輩である。

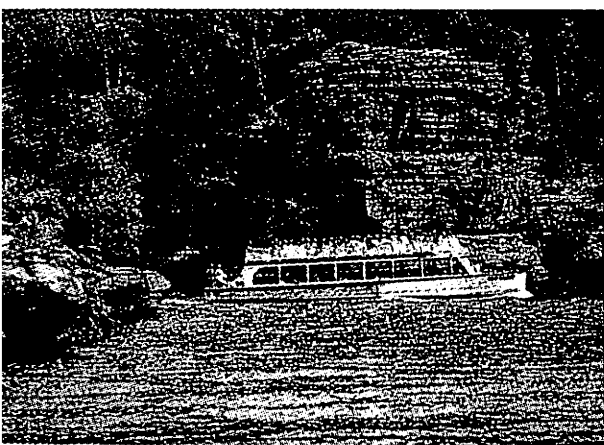
一九一九（大正八）年米騒動の翌年の六月、東京帝大農学部出身の農商務省臨時外米管理部首席技師山田憲は米の高騰でボロ儲けした横浜の米穀商鈴木弁蔵を殺し、死体をバラバラにしてトラंकに詰め、信濃川に沈めた。いわゆる「鈴木殺し」である。山田は外米輸入の指定業者の問題で鈴木弁蔵と接触していたが、彼をその非道な強欲と反社会性ゆえに誅殺したと法廷で陳述した。当時の社会状況を反映しているのは確実だが、もっと卑俗な裏があったのかもしれない。死刑になったが従容として死についたという。井上ひさしの『犯罪調査』（集英社文庫）によると、おそらく日本最初のバラバラ殺人事件である。山田は長岡在南蒲原郡中之島村の医院の息子、長岡中学出身の大秀才だ

った。長岡周辺の驚愕は大変なものだったらしい。

当時山田より二、三歳下の父は、長岡の米騒動に野次馬として参加していた。母は二十一歳で結婚まえた。この猟奇的事件にふたりともよほど衝撃を受けたらしく、二〇年近くのち、わたくしが少年のころ、吹雪が信濃川から「ごーごー」と荒れ狂って吹きつける夜など、よくその話を聞いた。吹雪の夜炬燵で聞いた「鈴木殺し」と鉦かねを打ちながらくる寒念仏の恐ろしさがいっしょになって忘れがたい記憶になった。

猪俣津南雄は「鈴木殺し」の山田とは中学の同級生で親友だったともいう。彼は事件をアメリカで聞き、心配して山田に手紙を書いたらしい。ウィスコンシン大学近くのおそらくは真新しい美しいアパートの一室で、ふるさと思いをながら手紙を書いていたのであろう。また、悶々として美しいメンドタ湖の岸辺を歩き回っていたのかもしれない。

この事件を両親の供養のためにも一度しっかり調べてなんらかの文章にしようとかねがね思っていた。その時はむろん猪俣にも登場してもらわなくてはならない。こんな通俗的な料簡でいたものを、わが女婿はもっと学問的で論争的なテーマでももっていると勘違いしていたのであろう。いづれにしても、猪俣がマディソンにいたのを知らなかったのは誠にもって不明だっ



ウィスコンシン・デルスの川ポート

た。いつの日か調べが進んだら、あの魅惑的なマディソンを再度訪ねようと思う。

二、インディアン・セレモニアル

(一) ウィスコンシン・デルス

わたくしたちはD・モエン氏の大きなバンに乗ってマディソンから一時間余りかけて、ウィスコンシン・デルスの河港にきた。夕方の河港の駅舎はガラんとし

た殺風景さで人の気配がなかったが、螺旋状になった坂の通路を通って桟橋におけると、二隻の川ポートにはすでに乗客が乗り組んでいて、とくに一隻は年配の女性観光客でいっぱいになっていた。そこから三〇分ほど川を遡って、初更から始まるインディアン・セレモニアを見にいこうというのである。

六、七十人用の川ポートの屋根からはずれた最後部座席に陣取って、ミシシッピー支部のウィスコンシン川を遡りながら兩岸に展開する絶妙な景観を楽しんでいた。兩岸は二、三十メートルの切り立った岩の絶壁で、そのうえに松の林が連なっている。岩はちよっどパイを真横からみるように薄い板状の積み重さなりになっていた。地元の観光案内（『ウィスコンシン・オート・ツアーズ』、一九九四・九五年度）によると、それらの岩はカンブリア紀の砂岩で、氷河で削りとられ、川全体が地溝のようになったとあった。大体がウィスコンシン州の北半分は氷河による景観で埋め尽くされているらしいのである。

暮れかかって岩も松も川面も黒ぐろとなり、夜風が冷え冷えとしてきた頃、隣でさっきから落ち着かずに体を左右に揺すりながら連れと話をしていた中年の男がわたくしに話しかけてきた。「どこから来たか」「観光か、この辺に住んでいるのか」などと聞いたあと、

自分は京都を知っているといった。ベトナム戦争に従軍したときのことらしいのだった。「生き残ってよかったね」といったら握手を求めてきた。なんでもニューヨークの保険のセールスマンらしいのだが、野球帽を被った荒っぽい話しぶりは職人ふうで、最初は大工かなんぞだろうと思った。

川ボートが急カーブを描いて左に旋回したと思ったら、暗やみから急に視界が開けた。中央に島があり、二手にわかれた川筋がそれぞれに相当の広がりをもっていたから、まるで湖にいきなりでたように思った。残照の夕映えが低い山々の稜線を区切って赤々と燃え立っていた。アーベント・ロート、若い頃憶えたことがふいに頭をよぎった。さらに緩やかに左に旋回してインディアン野外劇場の木造の棧橋についた。

(二) インディアン野外劇場

劇場は川に沿った谷間の鞍部のようになったところにあった。切り立った二、三十メートルの砂岩の崖をバックに、よく固められた土の舞台が半円形状に作られてあった。板をわたしただけの座席が弧を描いて舞台からすぐ急斜面をそるようにつづいていた。ちょうどそれは半円の摺り鉢のようになっているのである。見上げると黒々とした木々の梢を縁取りにして天空が

ぼっかりと口を開け、冴えわたった天の川が天井を斜めに区切って流れていた。冷涼な夜気に包まれ、なんと荘厳にして神秘的な空間なのだろうと、わたくしは黙って眺め回していた。

インディアン・セレモニアルはすべて太鼓の単調なビートに合わせた舞踏であった。暗闇のなかでスポットライトを浴びて踊るのだが、鳥の羽根で正装した若い兵士の戦闘場面であったり、驚の踊りであったり、古くからの社交ダンスである収穫祭の賑やかなスネークダンスであったりした。その振りや型は素人目にはほとんど同じようにしか見えなかったから、太鼓のビートの単調さのなかでときどき眠気に誘われた。娘の話では映画「ダンス・ウィズ・ウルヴス」のなかとほぼ同様だということだった。二回ソロの女性シンガーが崖の中腹でライトを浴びて歌った賛美歌には、透き通った空気の中だけではらわたに沁みとおるような清澄さがあった。

羽根で正装した司会の口上を聞きとれないでいたらみんなが起立した。誘われて起立した。突然崖のうえからスポットライトを浴びて輝くように紅白の幔幕がするすると降りてきた。それが星条旗に変わった。急に場違いな感じになった。この場面で星条旗は不似合いだということと、自分がアメリカに現にいるという

実感であった。

モエン夫人によると、どのインディアン・セレモニアルでも最後は星条旗だそうである。口上はインディアンがベトナムでも湾岸でもいかにアメリカの優秀な市民として勇敢に戦ったかという内容だそうである。セレモニアルのあと、観光客であり白人であるアメリカの善良な市民が大勢出演者に握手を求めていたことが、マイノリティとして隔離され、徹底的に差別されているインディアンらしい立場をいっそう際立たせているように見えた。

晴れわたった帰りの星の鮮やかさは見事なものであった。北斗七星もカシオペアも手にとれるような近さにあった。光るものといえば天空の星だけの漆黒の川面を、おし黙った観光客を乗せて、ボートは晩秋を思わせる深更の冷たく冴々とした夜気のなかを進んだ。

三、孫と子ども博物館へ

(一)

一般に、大人の旅の都合にあわせて子どもを引き回すと、そのうちに欲求不満が昂じて、子どもは訳がわからないほど不機嫌になってしまう。二歳半の孫の場

合は、マディソン四日目がそうだったし、ついでシカゴでは、娘夫婦は彼の不機嫌をとりなすのに手いっぱい、彼らはシカゴ美術館の見学を断念した。マディソンとシカゴの子ども博物館に立ち寄ったのは、なによりも彼に自主的な遊び時間をとってやることによって、不機嫌をやわらげるためであった。

(二)

マディソンでもシカゴでも子ども博物館はダウンタウンの中心にあり、とくにシカゴでは専門店が集合する大きな建物のなかにあった。

博物館に入るとまずマジックミラー、覗くと相手の顔が無数に見える両側からの万華鏡、大きな針金の輪で作るシャボン玉など、子どもが喜びそうなものがあるが、子どもはそれらにすぐ飽きてしまう。

子どもが夢中になるのは、登って遊べる飛行機やトラクターや救急車の模型であり、本物そっくりのキッチンであり、やはり本物そっくりの病院の診察室などであった。

ふたつの子ども博物館の共通のモットーは「君自身で触り、感じ、確かめよう。どうやれば楽しく遊べるか自分で考えよう」だった。マディソンの特徴は地元

あり、シカゴは祖父母と子どもの交流のための特別のコーナーがあることだった。

「ウソと真実」という動物の大きな写真の展示があった。たとえばタランチュラは形は大きいが毒性は弱く恐い動物ではないとか、アメリカン・アリゲーターは性質が温和で滅多に人を襲うことはない等である。シカゴでは「動物についてのウソ」という書物の作者をよんで話を聞き、実際に生きた駝鳥やワニ、蛇などに触れてみよう、といった会が企画されていた。

病院の診察室では、受付から聴診器、診察用のベット、人体模型まで本物そっくりにできていた。子どもが医者になったり、看護婦になったりして遊ぶ。聴診器で母親をみたてた孫が、「少し熱があるようですね」と医者そっくりに真顔でいったので大笑いになった。

ウィスコンシン州は合衆国第一の酪農地帯である。

マディソン子ども博物館の二階の大部分は酪農生産物と生産過程に子どもをどう親しませるかがテーマになっていた。乳牛と搾乳の実際、乳製品の生産過程と流通等を精巧な模型にして子どもが手で触れることができるようになっていた。さらに、プラスチック製のチーズや柔かい模型のパンが棚につまっていて、それを配達用の自動車に積んだり、キッチンでカウンターに腰掛けている付き添いの親たちに子どもたちが饗応し

て遊べる広場がつづく。ここでは、孫は地元の子どものたちの尻について夢中になって遊んだ。

シカゴの祖父母のコーナーでは祖父母と子どもの間の手紙や、写真の展示があり、特別企画として、祖父母はある一日は入場無料にして、子どもに家族の歴史を語る会をやる、といったものがあつた。

子どもは夢中で遊んでいるが、子どもたち相互には交流はなく、親は親でその辺に腰掛けて大らかにかつ忍耐強くそれらを眺めていた。シカゴでは黒人が比較的多かった。ひとりの若い黒人の母親が九人もの子どもをつれて遊びにきていた。みんなあなたの子ともかといったら、笑って指二本突き出した。二人の孫をつれたまだ若いじいさんが、少々疲れ気味で腰かけて孫の遊びを眺めていたわたくしに向かってウィンクした。ご同輩、つかれますなあ」といったところだった。

わたくしも思いっきり派手にウィンクを返した。

マディソンとシカゴの子ども博物館を見たかぎりでは、子どもにとって面白いだけでなく、大人にとっても興味がありかつ学べる水準という、アメリカの子ども博物館が共通してめざしている課題の多くを特別企画で補っているようにみえた。

マディソンでは子ども博物館の行事案内やら子ども用の書籍などが並べられた小部屋があり、壁に小片の

紙に書かれた親の意見や提案が貼られていた。人種差別問題と性差別、戦争に反対する意見が大部分を占めていた。これはシカゴでも同様だった。

これらの子ども博物館はいずれも維持基金を寄付でまかない、特別の財団によって経営されている。専任の職員の他に多くのボランティアがいる。壁に寄付者名が貼りだされていた。また会員（家族会員年会費三五ドル）を募集していた。シカゴの入館料は子ども二・五ドル、大人三・五ドル。

(三)

子ども博物館だけでなくアメリカの一般の博物館が赤いベルベットのロープやガラスケースを廃止して、展示物の一部あるいは全部を観客が手で触れることができるように（From "Hands-Off" to "Please Touch"）したのは、ここ一五年か二〇年くらいのことだそうである。それらを総称して"Hands on Muse-um"といっている。

一九七〇年代にボストン子ども博物館がその画期をつくった。「博物館は物のためではなく人のためにある」「子どものためにだけうまくいっても親は退屈するかもしれない。親も学べるものでなければならぬ」。ピアジェの理論的影響のなかで、はいはい段階、

よちよち歩き段階、さらに年長のための遊び場、遊び場全体を見渡せる親の部屋といった具合に、精緻な組立をつくりだした。

この他に数多くの Please Touch の科学・技術博物館や自然博物館が子どもや大人に学習の場を提供する。参考として掲げた書物には Hands-On Museum の理論とともに、全米二六五の Hands-On Museum が紹介されている。

〔参考〕 Joanne Cleaver; Doing Children's

Muse-ums, Williamson Publishing, 1992.

（註）三、「孫と子ども博物館へ」は『母と子』

一九九四年二月号（母と子社）から転載

（やぎ みつお）にいがた県民教育研究所長

